

第三章 先ポリス時代ギリシア史の構造

小レポート：ポリス以前のギリシアの歴史を時代区分し、それぞれの時代の特徴を簡単に記せ。

discours（言説）：政治的な支配、民族的な優越などを意識的或いは無意識的に肯定する教義

（１） 新しい文化の創造源はヨーロッパの北部

（２） アルプスの南、ギリシア正教やカトリックの地に新しい文化を創造する能力があるはずがなく、これらの地の住民は常に外部から侵入してきた北方の移住民によって征服され、彼らによってもたらされる新文化を受け入れるだけである。

（３） 印欧語族の居住地はヨーロッパ以外の地、ウクライナや南ロシアの草原地帯にあり、そこで分化して各地に拡散していった。

（４） 北欧にこそ若くて荒々しく創造力に満ちた蛮族（遊牧民）が居り、道徳的に退廃し肉体的に脆弱な南方の住民を征服し、文化の刷新と道徳の再建に寄与してきた。

（５） 古代末期のゲルマン民族の大移動のイメージで語られる。

ドイツやイギリス、フランスなどの西欧諸国による南欧、オスマントルコ支配下の東欧支配の言説の背景を構成してきた。

古代ギリシア人自身の民族移動の伝承の存在

英雄たちの移住：ペロプス一族の移住、カドモスの移住（イオの兄、フェニキアから竜の歯より生じた一族を率いて）、アトレウス家の移住（殺人を犯して蟻の汚れを逃れる為にエジプトから移住）、ヘラクレス家の移住、エトルリア人の移住（テュルセノイ）など。

アテナイを除いて土地からの生え抜きという神話（アッティカの祖、ケクロプスは下半身がヘビの姿をした英雄神）ではなく、移住による入植の神話を持っている。

ギリシア語の方言群の空間的分布に関する言語学的研究（19世紀に盛んになる）

東方方言群：アッティカからエーゲ海、さらには小アジアの沿岸、キプロスに分布。

イオニア方言、キプロス方言、アルカディア方言など
アルカディア方言とキプロス方言の言語的近さ。

西方方言群：ギリシア北部からペロポネソス、クレタ、小アジア沿岸に分布。

アイオリス方言、北西ギリシア語方言、ドーリス方言など。

ドーリス人の移動と、それに伴うイオニア人、アカイア人、アルカディア人の移動の神話伝承の存在。

ホメロスの作品ではトロイに遠征したギリシア軍はアカイア人と呼ばれている。

古典学説の形成：バルカン半島の北部或いはウクライナの草原地帯にいたギリシア語の母集団から方言分化した集団が、幾つかの異なった時代にバルカン半島を南下し、南のギリシアの地に侵入して現地住民を征服し、自分たちの文化と言葉をギリシアにもたらした。

パウル・クレッチマーの説：

ギリシア語が本来持たない語尾（-nthos や-ssos）を持つ地名、人物名の存在に着目。

コリントスやクノッソスなどの地名。ヒュアキントスやナルキッソス（何れもギリシア人が持ち込んできた神神の従者で、死んだ神）などの古い神神の名前。

ギリシア人がギリシアの地にやってくる前には-nthos や-ssos の語尾を名詞に持つ先住民がいた。彼らはその後やってきたギリシア人に征服され、同化する中で民族としてのまとまりを失ってしまったが、地名などにその痕跡を残した。

前 2000 年頃：イオニア方言を話す人々が移住＞ミニュアス式土器に

代表される中期青銅器文化をもたらす。

前 1600 年頃：アカイア方言を話す人々が移住>ミケーネ文明をもたらす。

前 1200 年頃：ドーリス方言を話す人々が移住>ミケーネ文明の破壊と鉄器並びに火葬文化をもたらす。

イオニア人の逃避：メッセニアのピュロスからアッティカへ、アッティカから小アジアの沿岸へ。

アカイア方言を話す人々の逃避：ペロポネソス各地からアルカディアへ、或いはペロポネソス北部のアカイア地方へと逃避。>この頃からアルカディアやアカイアにミケーネ式の土器が出現。

アルカディアからキプロスへ一部の人々の移住>アルカディア方言とキプロス方言の近似。

古典期の方言群の分布とその当時知られていた考古学的事実との整合性から、定説化する。